

主はあなたのために

2008.12.16(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ルカの福音書 2章8節から20節

さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。御使いは彼らに言った。「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

現代の私たちにとって一番大切なことは何でしょうか。静まることではないかと思いません。主の大いなる愛を見つめること、主の愛を新しく体験すること、そのためには先ず静まることこそ、大切なのではないかと思うのです。

私たちは、いろいろなことについて考えたり、心配したりします。また、どうしてもしなければならぬことがあまりにも多いので、どうしたらいいが分かりません。けれど、最も大切なことは、静まることなのです。主によって愛されていること、体験すること、新しく知ること、この愛を新しく受けることこそ、最も大切なことなのです。

もちろん、主に愛されているということは理性ではつかめない事実です。けれど、最も素晴らしい奇蹟です。ヨハネ伝3章16節こそ、聖書の中心である喜びの知らせです。

ヨハネの福音書 3章16節

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

「世」とは、人間一人一人のことです。「永遠のいのち」とは、もちろんイエス様です。イエス様と完全に一つになることです。

初めの人間は永遠のいのちを持っていなかったのです。造られたいのちだけしか持っていなかったのです。造られたいのちも、もし罪という問題が起こらなかったなら、アダムは永遠に生きていたのです。けれど、「永遠のいのち」とは全く違うものです。すなわち、イエス様と完全に一つになることです。

今読みました箇所は旧約聖書の預言の実現です。旧約聖書のイザヤ書 9 章 6 節、7 節に、次のように書かれています。イエス様がお生まれになる以前、何百年も前に預言されたことばです。

イザヤ書 9 章 6 節

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

この偉大なる奇蹟について考えたとき、パウロは喜びに満たされて主をほめたたえたのです。

コリント人への手紙・第二 9 章 15 節

ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。

この世で最も気の毒な人々とは、いわゆるホームレスの人々ではないかと思うのです。以前アメリカのロサンゼルス飛行場に入る前に、気の毒な男が立っていて、大きな看板を持って「私はホームレスです」と。彼は助けを求めたのでしょう。日本の多くのホームレスはちょっと違います。ホームレスのために特別なバラックのような建物が建てられたことがあるのです。「どうぞお入りになってください。ただで良いです」と。しかし入る人はあまりいなかったようです。「今の状態でいい」とでも思っていたのかもしれませんが。

最初のホームレスとなられたのは、イエス様なのです。イエス様はご自分の家を持っておられなかったのです。乞食の中の乞食でした。そして、イエス様はご自分の意志で、ホームレスになられたのです。このことは考えられないことです。パウロは、

コリント人への手紙・第二 8 章 9 節

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。

天で考えられない栄光をお持ちになったイエス様は、本当にホームレスになられました。貧しくなられたのです。どうしてでしょうか。それは、

9 節後半

あなたがたが、キリストの貧しさによって、富む者となるためです。

「富む者」とはどのような者であるかと言いますと、「行き先は決まっている。天国だ」という確信を持つ人々ではないでしょうか。また、「自分の過ち、わがままは赦されているというだけではなく、永久に忘れられている」と確信できる人なのではないでしょうか。

「イエス様ご自身」こそ、最も素晴らしい贈り物であり、父なる神の愛の表われそのものなのです。この救いの神を経験した人の証しは、次のようなものでしょう。

ダビデは、

詩篇 118 篇 14 節

主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。

イザヤも、同じように言うことができたのです。

イザヤ書 12 章 2 節

見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。

イエス様を生んだマリヤも、この子は約束された「救い主」であると確信したのです。

ルカの福音書 1 章 46 節から 48 節

「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。」

主は犠牲になりました。どうしようもない人間のためにです。

主を知るようになった人々は、悩みながら喜ぶことができます。多くの人々は奇蹟を経験したいと願います。けれど、主の御心はちょっと違います。私たちは奇蹟を経験するよりも、奇蹟そのものとならなければいけません。そして今、世の中で不幸を経験しながら、悩みながら喜んでいる人々こそ、奇蹟なのではないでしょうか。ダビデは、

詩篇 16 篇 11 節

あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、

と。静まれば、主の前に静かになれば、喜びで満たされます。悩みがなくなるのではありません。この大いなる贈与者であられる神は、人間を富む者になさりたいのです。

しかし、そのために一時的に問題を解決しようとはなさいません。普通の人間は、永遠なるものについて考えるよりも、今の問題を早く解決してもらいたいと願います。そして、

祈っても答えられないのは、「やはり主はずるい。のんびりすぎる。いったいどういうものか」と。しかし主は、適当なものを与えようとなさいません。最善のものだけしかお与えになれないからです。

最も尊いものとはいったい何でしょう。「主との交わり」です。初めの人間は、主との交わりを持っていましたので本当に幸せでした。初めの人間は、完全であっただけではなく、初めの人間の置かれている場所も完全でした。想像できないくらい素晴らしいものでした。

しかし、初めの人間は、この素晴らしい贈り物、すなわち「主との交わり」を大切にしなかったのです。「主から離れよう」、そのような気持ちはもちろんなかったのです。だまされただけなのです。どうしてだまされたかと言いますと、祈らなかったからです。「主よ。どうしましょうか。あの蛇がこのように言いました。普通の動物は喋らないでしょう。いったいどういうことでしょうか。教えてください」という態度をとったなら良かったのですが、祈らなかったのが誘惑に負けてしまいました。結果として、「主との交わり」は不可能になったのです。

その時、初めの人間はもう駄目だと思ったかもしれませんが、それと関係なく、主は、「違う。今から救い主が来る」とのご計画を持っておいでになりました。救い主は、人間の一時的な問題を解決なさるのではなく、「永遠なるもの」を与えたいと。すなわち、人間の罪の問題を解決なさるお方、救い主なのです。

アダムとエバは、罪を犯すことによって、罪の性質を持つ者となったのです。ですから、アダムとエバの子どもも、罪にまみれた単なる罪の性質しか持っていなかったのです。アダムの子孫は、全部これと同じ性質、すなわち罪の性質を持つようになったのです。

ローマ書5章を読むと、次のように書かれています。

ローマ人への手紙 5章12節

そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がったのと同様に、 それというのも全人類が罪を犯したからです。

ここで、三つのことが書かれています。

- * 第一番目。罪があるということ。これは事実です。人間は過ちを犯すもので、わがままです。
- * 第二番目。どんな人間も罪人です。聖書ははっきり「義人はいない。ひとりもない。善を行なう人もいない。ひとりも」と。
- * 第三番目。どんな人間でも罪を犯す前に、もうすでに罪人であるということです。

罪とは、悪い行ない、過ちを犯すということよりも、主から離れている状態そのものが

罪なのです。ですから人間そのものは、立派になろうと思っても無理です。

ヨブは次のように言ったのです。

ヨブ記 14章4節

だれが、きよい物を汚れた物から出せましょう。だれひとり、できません。

その通りです。アダムを持っている本質は罪を犯したことによって汚れてしまいました。そして、彼は罪人になったので、罪人の子は当然罪人です。

しかし、主なる神は人間の永遠の幸せを考えておられましたので、救い主イエス様が遣わされました。神は実にそのひとり子、父にとってすべてのすべてであられるイエス様をお与えになられました。犠牲になさいました。十字架に付けてくださいました。殺されたのです。どうしてかと言いますと、私たちの身代わりになって「人間を救うため」でした。

聖書の語っている救いとは、主との交わりをもたらすことです。救いとは、いのちの泉との交わりを持つことです。人間は、このいのちの泉との交わりを持つなら、確かに生き返り、救われ、悩みながら喜ぶことができます。

誰が人間を救うことができるのでしょうか。死人は決して神のいのちとの交わりをもたらしません。すべての人間は罪の性質を持っており、霊的に死んでいるので、人間を救うことはできません。人間は、自分でいのちの泉への道を見出すことはできません。どんな宗教も、どんな教えも、どんな道徳もできません。

ルカ伝の中に、イエス様の話された一つの記事が出てきます。良きサマリヤ人の話です。
ルカの福音書 10章30節から35節

イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』」

強盗とは、人間とは、そのような者です。自分のことだけしか考えていません。祭司とは、宮の中で主に仕える者で、よく聖書を勉強した宗教家でした。祭司は、「俺と関係ない。危ない。逃げたほうが良い」と。レビ人も、同じように宗教家です。あるサマリヤ人は、外国人、他国の者です。「彼を見てかわいそうに思い、近寄って...」、逃げようとししないで、(つまり、全く関係の無い他人であったにもかかわらず)近寄って行ったのです。他人だ

ったでしょう。全く関係のない者でした。

結局、半殺しにされた者は、自分で自分を救うことはできませんでした。この旅人を救ったのは、他国の人でした。同じ国の人も、またいかなる宗教も、旅人の絶望的な状態を救うことはできなかつたのです。

私たちにとって当然なことは、人間は人間を救うことができないということです。宗教に入ることによってだまされます。あらゆる宗教は本当の救いを得るための一番大きな妨げとなります。人間は決して人間を救うことはできません。主なる神の側からの働きがなければ、駄目です。けれど、主は、ご自分（主）から離れ、罪人となった人間を探しておられるのです。私たちを救うために、御父はご自分の持つておられた一番尊いもの、一番愛しておいでになるもの、すなわち「イエス様」をお与えになりました。犠牲になさつたのです。それはなぜ必要だったのでしょうか。

聖書のどこを読んでも分かります。主なる神は聖なるお方です。全て知っておられるお方です。そして、この父なる神の聖さは、罪との交わりを持つことができません。主なる神は、罪と妥協することはおできになりません。したがって、罪、人間のわがままを罰し、罪人を追放せずにはおられなかつたのです。もし、主なる神が罪を罰することをなさらないなら、結局罪と妥協することになってしまいます。それはもちろんあり得ません。

主なる神は、初めの人間と親しい友のようなものでした。しかし、罪によって、人間の審判者、裁き主になられたのです。「主は非常に人間を愛しておられるので、人間を罰することはなさらない」と言っている人もいますが、これは嘘です。誤りです。主は全く聖なるお方ですから、罪を裁かずにはおられません。主は、全く聖なるお方であられると同時に、愛のかたまりであられます。主は、全く聖なるお方であられるので、人間の審判者、裁き主になられなければならなかつたのです。けれど父は全き愛のお方でもあられますから、救い主をお与えになつたのです。

ヨハネの福音書 3章16節前半

神は、実に、そのひとり子をお与えになつたほどに、世を愛された。

これこそ、クリスマスの奇蹟です。確かに多くの人々は、クリスマスとはどのようなものであるかを、全く知りません。ですから、クリスマスではなくて、Xマスと書いているのではないのでしょうか。たとえいろいろなことが分かつたとしても、イエス様のお生まれになつたことについては考えるでしょう。けれど、イエス様の御降誕がイエス様の始まりではありません。私たちとは違つたでしょう。私たちの誕生は私たちの始まりでした。イエス様の場合はそうではなかつたのです。イエス様は、永遠から考えられない栄光を持つておられたのです。世界が造られる前に、イエス様は御父とともに素晴らしい栄光をお持ちになつていと聖書は記しているのです。

イエス様は、私たちの身代わりになられるために、奇蹟的にお生まれになりました。そ

して、永遠の贖いのみわざを成し遂げられたのです。御子イエス様の流された血は、人間のすべての罪を取り除くために十分だったと聖書は語っているのです。主は、私たちのような者を救うために、ご自分の持っておられた一番尊いもの、一番愛されたイエス様をお与えになりました。この大きな贈り物を受け入れることができるのは、素晴らしい恵みではないでしょうか。

前に話しましたように、イエス様を生んだマリヤは告白しました。「私のたましいは主をあがめ、私の霊は、救い主なる神をたたえます」と。

私たちはいかにしてこの大いなる贈り物を受け入れることができるのでしょうか。

答えは三つです。

* 第一番目。「感謝する」ことによって。

感謝できない人々は、本当に孤独でかわいそうです。聖書ははっきり語っているのです。感謝をしないことは罪です、と。イエス様は、私たちがまだ罪人であったとき、私たちの罪滅ぼしのために犠牲になられたのです。ご自分のいのちを捨ててくださいました。私たちはこの主に対し、心からなる感謝をささげているのでしょうか。感謝をしないことは本当に罪であり、感謝をしない生活は天の窓を閉じてしまうものです。詩篇 50 篇を見ると、次のように書き記されています。

詩篇 50 篇 23 節

「感謝のいけにえをささげる人は、わたしをあがめよう。その道を正しくする人に、わたしは神の救いを見せよう。」

とあります。

このみことばを逆に考えると、感謝のいけにえをささげない者は、わたしをあなどり、自分の行ないを慎まない者には、神の救いが示されない、という意味になり、主に感謝のいけにえをささげない者は、生かされない、元気にならないということになります。

私たちは、主に感謝しない罪を言い表わすべきではないでしょうか。主にお詫びしたいのではないのでしょうか。本当に主は、私たちが心をもって、くちびるをもって感謝のいけにえをささげることを待っておられます。

パウロは、感謝した男でした。

コリント人への手紙・第二 9 章 15 節

ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。

と、彼は喜びの声を上げることができたのです。

私の最も大切なカンタータの一つの内容は、次のようなものです。ヨハン・セバスチャン・バッハがこのカンタータを作ったのです。意味は次のようなものです。

「私は、私の生活を見ると、私の口から次の言葉が出てきます。『主よ。私の神よ。あなたは私のために何をなされたのでしょうか。たとえ、私の舌が千枚あっても、あなたのなされたことを言い表わすことはできません。あなたは何と善良なのでしょうか。あなたの愛は、何と豊かでしょう。だから、あなたに賛美と栄光の歌を歌います』と。」

私たちは、主に対して心からなる感謝をささげているのでしょうか。

私たちはいかにして提供された贈り物を自分のものにすることができるのでしょうか。今話しましたように、「感謝をする」ことによってです。

* 第二番目。「主を礼拝する」ことによって。

主は、霊とまことをもって礼拝する人々を探し求めておられます。イエス様は、私たち一人一人のために人間となられ、代わりに罰せられたのです。御父は私たちの罪のためにイエス様を罪のかたまりとされました。このことに対して、心からなる礼拝をささげようと思いませんか。御子イエス様のものすごい苦しみを考えると、自分の罪を嫌いませんか。

問題は全くはっきりとしています。それは、自分と主イエス様の間の問題です。イエス様を受け入れたいのか、それとも拒みたいのかのどちらかです。

クリスマスの呼びかけとは、「イエス様を受け入れなさい。父なる神の贈物を自分のものにしなさい。そうすれば、変わります。見方が変わります。価値観も変わります。永遠のいのちを持つようになるからです」と。これは何という贈物なのでしょうか。何という救いのご計画なのでしょうか。

クリスマスの素晴らしい、喜ばしい知らせとは、何でしょうか。イエス様は、人間一人一人のためにベツレヘムでお生まれになりました。けれど、もしイエス様が千回もベツレヘムでお生まれになられたとしても、自分の内にお生まれにならなければ、自分にとって何の役にも立ちません。

主なる神は人間一人一人に、イエス様の内にある永遠のいのちを差し出しておられます。イエス様の弟子たちは、イエス様を見て、「彼の内にいのちがある」と証しました。本当にそうです。イエス様は、人間に永遠のいのちを与えるために来られたのです。

イエス様はよく言われました。「わたしはいのちそのものです」と。言葉に言い表わせないほどの賜物を受け入れるか、拒むかのどちらかです。

イエス様は既に十字架でご自身のいのちをささげられました。イエス様はこうして悪魔に打ち勝たれました。ですから、人間はもはや悪魔の奴隷でいる必要はありません。また、イエス様は全人類の債務を担われたのです。ですから、誰でも主なる神に近づくことができます。イエス様の完全な救いのために感謝すべきではないでしょうか。

主なる神の贈り物をいかにして自分のものにすることができるのでしょうか。
今話しましたように、「感謝する」ことによって。「主を礼拝する」ことによってです。

* 第三番目。もうひとつ、「イエス様を愛する」ことによって。

イエス様を愛する人は、必ずみことばを、聖書を愛するようになります。私たちは飢え
渴きを持って聖書を読むのでしょうか。飢え渴きを持たないでただ聖書を読むことは、主
の目からご覧になると罪でしょう。「主よ。語ってください。教えてください。今から読み
ます」。こういう心構えを持って聖書を読むと、必ず元気になるだけではなく、主を愛さず
にはいられなくなります。

イエス様に対する愛の欠乏は、同じく罪です。主は、私たちが心を尽くし、精神を尽く
してご自分を愛することを願っておられます。単一な心をもって主を愛することを願っ
ておられます。どうしてかと言いますと、私たちに愛されていないならば寂しくなるからでは
ありません。私たちは主を第一にし、主を心から愛することによってのみ、本当の意味で
自由になり、満たされるようになるからです。

私たちはイエス様の血潮によって贖われた者であり、私たちのすべては主のものです。
私たちの愛もひたすら主に注がれなければなりません。

主を愛する者は、主に頼る者ではないでしょうか。主に頼らないことも、罪です。主は
今日、ご自分に頼る人を探し求めておられるのではないのでしょうか。私たちがイエス様に
頼ることが、イエス様のご栄光を現わす唯一の道でしょう。もし、私たちが主をのけ者に
して一人で何かをするなら、それはイエス様の恥となります。私たちは本当にイエス様に
頼っているのでしょうか。もしそうなら、私たちは自分で何かの役割を演じることはでき
ないでしょう。そしてイエス様は、ご自分の栄光を現わされるのです。主のご栄光が現わ
れること、これが最も大切なことではないのでしょうか。もし、イエス様のご栄光が現われ
たら、自分は変わることはない喜びを、また主ご自身の平安を持つようになるに違いあり
ません。

ルカ伝 2 章 10 節に、次のように書かれています。これこそ、初めてのクリスマスの喜
びの中心であります。

ルカの福音書 2 章 10 節、11 節

**「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに
来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりま
した。この方こそ主キリストです。」**

了